

# 巻 頭 言

2007. 8月号  
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

## 理解してから理解される

茗溪塾塾長 宇野雅春

夏期講習もいよいよ中盤に入ってきました。勉強がきついと感じることも多くあると思います。人間は弱いもので、自分のことが上手くいかなくなるとなぜか人の欠点が気にかかってきます。自分にも欠点があるのに、人の欠点ばかりが気にかかるのです。

自分の見方が正しくて、相手が間違っていると考えると、逆にたくさんの間違いを起こします。自分の都合のいいように相手を変えようとして、トラブルになります。生徒の中で起こるいじめの大半はこんなところから始まります。「...といわれた。(悔しい)」が、友達同士の間で取りざたされ一人歩きしているうちに、相手の人格まで否定するようなことになってきます。「別に悪い人ではないんだけど...許せない」という感じです。

相手の「人格」と「その人がとっている行動」はよく考えれば分かることなのですが、一応分けて考えるべきことです。このことに無自覚だと、相手の人格まで傷つけてしまうことになってきます。友達とけんかをして、つい口にしてしまった言葉、言った言葉だけがドンドン拡大解釈されて、その結果、その人の人格がおかしいということになるわけです。少なからずそんなことで悩まされた記憶が、私にもあります。時として眠れないほど悩まされました。理解されないということはとても辛いことです。

夏期講習や合宿の中で、今私たちが目指しているのは、「ともに戦いともに勝つ」強い集団づくりです。受験に合格するためにそれが大きな力になるからです。人と人のつながりが、人を育てるということ。でも、それが意外と難しいのです。

塾の講師7箇条の第一条に掲げていることが「チームワーク」なのですが、簡単に考えている人ほど、内容が分かっていない気がします。「なれ合い」と「チームワーク」は全く違う物です。受験を何度も経験していると、いい意味でのチームワークが最後にはできあがっていることに気づきます。これは受験に合格するという、「目的」が同じということに起因しているのかもしれませんが。夏期講習は、長い時間連続して一緒にいるために人間関係トラブルが起りやすい反面、本当の意味でのチームワークが作れる時です。

そこで「7つの習慣」の中の「第5の習慣」を紹介します。「相手を理解してから理解される」です。この習慣の出発点は原則に「人それぞれに見方がある」をおくことです。自分の見方が全てではないことに気づくことと他人と自分の違いを認めるということ。そして相手を「理解する」ということ。そのための1歩は相手の立場になって話を聞くということです。また言葉だけを聞くのではなく相手の動作や態度にも注意して聞くということです。忙しい親が子供に対する時は、この「感情移入の傾聴」が出来ないために子どもは黙ってしまいます。親は話を聞く前に決めつけ結論を押し付けます。そうすると、子どもはこの人に何を言ってもダメだと思い、心を閉ざします。

子供同士の場合はもっと深刻です。そもそも言葉が正確に伝わるほうが少ないからです。

ここではもう一歩前に進む必要が出てきます。お互いの「違いを認める」というレベルから「違いを歓迎する」というレベルまでです。お互いが自己主張するとして違いを歓迎するところからはもっと素晴らしい「アイデア」が出てきます。これが「相乗効果」です。

夏期講習そして合宿や短期集中特訓の中でもこのグループ作りを目指していきます。教える側も教えながら学び、学びながら教えていくことを実践していきたいと思っています。